

人生の目的や目標を見つけて努力している人たちには大いに共感する。一生かけて、信念を貫くことは大変だけれど、いつでも休み休みやればよい。世界中には真摯誠実な若者を支える人々はたくさんいるし、若者に共感する本当の師友もかなりいる。学校教育制度がどうであれ、学校教育履歴を越えて、自分のやりたいことを、めげないで、ゆっくりと個人学習履歴を続け、それなりに長い人生で蓄積していけばよい。

この捻くれ爺さんだって、10歳の頃からバス停に花を飾り、花壇を造るなど、今でいうところの環境活動を始めていた。子供の頃からいじめに抗って毎日喧嘩ばかりだったが、それでも家族に支えられ、多くの師友に励まされてきた。さすがに中学生頃になると、腕力も付き、闘う喧嘩は暴力犯罪になるから、闘わずに抗う非暴力不服従にすることにした。数年前、自然環境保全を長らく職業にしていた知人 Y が、抗い続けるという表現を使うのを聞いて、腑に落ちた。以来、退行する不正社会とは闘うのではなく、まず個人として抗うのだと理解した。それでも、めげることなく、凡人は挫折せず、立ち直りが早いから、かなりの仕事を人知れずとも実現してきた。

簡単にはできないが、一人一人が自分で意思して考え、幸せな人生を創ろうと続けることだ。尊敬できる偉人たちだってそんなだった。努力する人を手伝ってくれる人はそれなりにいる。励みにし、見習いたい、素晴らしい人生モデルは今も過去にもたくさんある。本などの中にも、人生の最大遺物を見つけることもできる。爺さんも生きているうちは、若者たちのお手伝いをする。爺さんはエールを贈るぞ、若者たちに。

先ほど見ていた夢を思いだそうとした。ドンドン道に迷っていく。コーヒーを探しに出た。5杯のコーヒーと1杯の紅茶。知らない街、新しい地下鉄に乗り、バスに乗り換えた。迷いの帰途、交差点。電車、バス、なぜか台に載った紙の切片。何の脈絡もない。

日頃、流行作家の本はほとんど読まない。しかし、『SDGsの大嘘』という表題につられて、つい読んでみた。池田清彦(2022)は生物学者だそうで、若い頃には昆虫の研究もなさっておられたようだが、案の定、基礎研究は早々とすっかりよして、評論家タレントになられたようで、論文として並べられているのは週刊誌や新聞のエッセイがほとんどだった。軽口はまさに軽快で、人口問題、環境ビジネス、マスコミなどの批判にはとりあえず賛成する部分も少なくはない。里山への好意的な理解もうれしい。ところが、蛇足で末節に記された遺伝子組み換え作物や培養肉の礼賛には、迎合的でこの部分が生物学者の実は本音かと残念に思った。

秋嶋亮(2022)は社会学作家だそうだが、略歴さえ明かされていない。『無思考国家』(だからニホンは滅び行く国になった)に記されていることは気難しく面倒くさいが、この多くは私も長らく考えてきたことで、同意する点が多い。まえがきの結びで次のように記している。

一連の対話編が読者の精神に深く着床し、虚構を粉砕する道具となることを企図しており、知的反抗の広がりやニホンの暗黒状況を変えることに一縷の希望を託している。やはり書く者は絶望しないのだ。

秋嶋の論じた 5 章の課題は次のとおりである。第 1 章日本の暗黒化が止まらない、第 2 章直視すべき過去と現在と未来、第 3 章無知を自覚しないという悪、第 4 章洗脳と調教の国家、第 5 章破局の時代に突入した。事実隠された底意地の悪さ、毒性を指摘することは、まずとても重要である。でも、その問題をいかに解決するについても、論考を深め、提示しないと、絶望の先に希望は見えてこない。私たちが欲しいのはその知的反抗、すなわち解題解決のための希望が持てる手法である。しかしながら、根底 radical にまで思考を深めるには相当の年季が必要だ。

私は 50 年余の研究成果として、ほのかな希望に近づく到達点はある程度まで示せたと自負している。すなわち、①第四紀における植物と人間の関係史、雑穀の栽培化過程と伝播、②人類における心の構造と機能の進化、環境学習の実践的な方法、③縄文文化の系譜にある山村農耕とムラ社会の様態、である。これらは事実実体に基づく課題解決への根底的な提案である。電子出版で提示しているが、植物学、教育学および民族学における個人研究の到達水準はこれらで評価していただきたい。三浦梅園が言ったように、私にとっても学問は飯だった。流行には抗い、一途に興味を追い続けた。悔しいことは多いけれど、これで研究人生は充たされた。

『生き物の文明への黙示録』 www.milletimplic.net

参考文献

秋嶋亮 2022、無思考国家—だからニホンは滅び行く国になった、白馬社、京都。
池田清彦 2022、SDG s の大嘘、宝島社、東京。

2022. 7. 4